

# ◎シリーズ 長岡京歴史散歩

102

近世の開墾史

～発掘された水田畦畔けいはん～

長岡京市西の京にある現在の水田を1メートル近く掘り下げると、灰色の粘質土が見つかりました。この土層の上面は、写真のように幅約30センチ、高さ約10センチの湾曲した高まりで、北と南に区分けされていました。高まりの南側には約20センチの段差があり、北側は南側より高くなっていました。それに、高まりより北側と南側は、それぞれほぼ水平面になっていました。これほど古い昔の水田と、水田を区画していた畦畔のようだと判断をしました。そこで、古い地図や写真を探して、昔の様子を探ろうと努力しました。しかし記録に残っている水田は、すべて今の水田と同じで、調査地内は一枚の水田でした。このことから、明治時代以前の水田跡と考えられます。では、いつ頃の水田跡なのでしょう。

発掘調査で見つけたこの水田跡は、厚さ約20センチ以上の、洪水堆積と考えられる礫層れきそうで埋め尽くされていました。この礫層からは、江戸時代の染め付け茶碗などが出土しました。また水田跡は、1メートル以上の厚い砂礫堆積の上にあります。この砂礫層は、調査地から東約100メートルにある小畑川の氾濫によるもので、出土した中国製白磁から、16世紀頃の堆積と考えられます。このような成果から、見つかった水田跡は、16世紀から17世紀の間に、小畑川の流路が変わってから、荒地を開墾した水田だろうと考えることができます。砂礫の上に堆積したわずか10センチ前後の粘質土を開墾し、水田化した当時の技術と勇気・努力の跡を垣間見るようです。

また、この水田跡の粘質土層と、下にある砂礫層の間には、土層の乱れのある部分も見つかりました。16世紀から17世紀頃に土層を乱した原因を探ると、慶長地震（1596年、M7.5）や、寛文地震（1662年、M7.6）が知られています。わずかな土層の乱れが、この大きな地震に結びつくかどうか、結論はできませんでしたが、時代考証が正しければ、可能性として有力です。

（なお、この調査では、佛敎大学教授の植村善博さんに土層に関して現地で見学させていただきました。）



▲西の京で検出した江戸時代の水田跡